

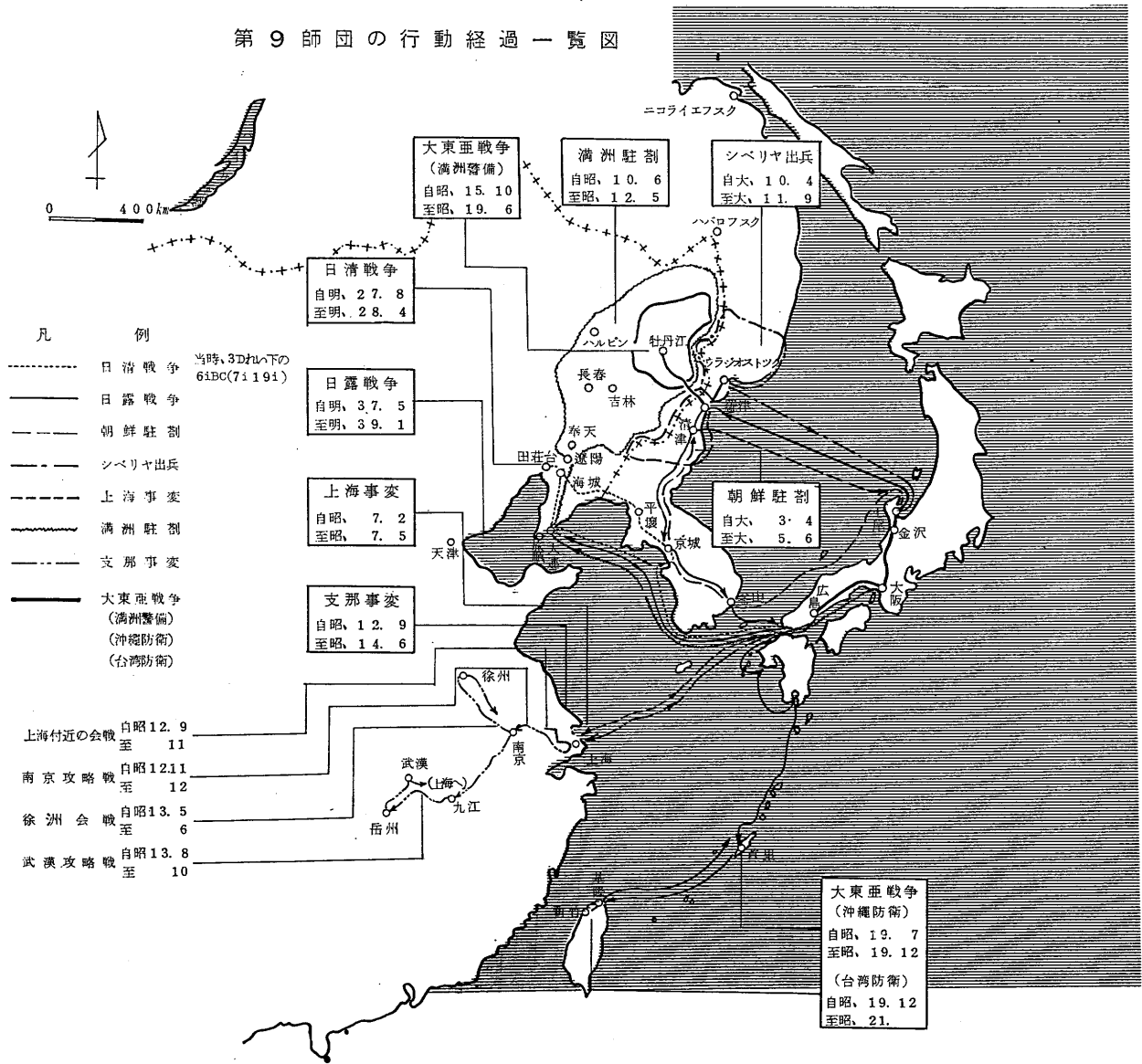
本書は第10師団隊員の教育訓練の資

に供するため編さんしたものである。

第九師団戦史

第 10 師 団

第9師団の行動経過一覧図



第3節 転進命令下る

第9師団が永久駐屯の決意を以て渡満1年を経過した昭和16年(1941年)12月8日、わが国は、米英蘭に対し宣戦を布告して、大東亜戦争に突入した。大東亜戦争の第1段作戦は前述の如くわが軍の向う処敵なく、国民も亦戦勝に酔いしれていた。

わが陸軍は、第1段作戦の進展に伴い、兵備の拡充整備に着手し、関東軍には方面軍司令部2、軍司令部、機甲軍司令部各1、戦車師団2を新設し、マレー作戦で武勲をたてた山下奉文中将を牡丹江の第1方面軍司令官に任命した。関東軍が名実共に精銳を誇つたのは、関特演以来この時期までであった。

昭和18年2月9日、日本軍は、ブナ、ガダルカナルより撤退を開始した。5月22日、北方のアッツ島が玉砕し、9月8日、枢軸国イタリアが無条件降伏し、戦局は漸く憂色に包まれてきた。当時関東軍の南方転進のうわさが盛んに流れ始めた。うわさは事実となつて大本営が、戦勢挽回を企図して、中部太平洋戦域に兵力増強を始めると、その先陣を承つて昭和19年2月、第29師団は遼陽付近から中部太平洋のグアム島に転進した。第29師団は、昭和15年7月の軍備改編により創設された師団で、創設以来長い間第3師団に属していた郷土の歩兵第18聯隊(豊橋)が含まれており、第9師団にとつても因縁浅からぬ師団であった。

次いで昭和19年(1944年)6月15日、遂に第9師団に対し、師団は釜山に集結すべしとの転進命令が下達された。然し当時師団の前進目標は未だ全く不明であった。

第8章 大東亜戦争

第1節 開戦のあらすじ

昭和15年(1940年)9月27日、日、独、伊三国軍事同盟が成立し、次いで翌年、4月13日には、日、ソ中立不可侵条約が成立したが、当時欧州の情勢は波乱を極めており、又極東においても中国を焦点として日、米の対立はますますその激しさを加えていた。

特に米国の援蔣政策は露骨化して、華南広東を通じ、更に仏印から大量の軍需物資を送って蒋介石をあまり立て、わが国の悲願であった支那事変の早期解決を妨害した。同年6月、独ソ戦が開始されたので、わが軍は重慶進攻作戦を中止し、満洲に兵力を増強して世界情勢の変化に対応することとした。

この間日米交渉は続けられ、平和的解決に努力したのであったが、米国は、日本軍の中国からの即時無条件撤退と、三国軍事同盟の放棄を強要するのみで、交渉は渾々として進展しないばかりか、米国は与国を誘って、わが国の経済封鎖を断行するに至った。A、B、C、Dの日本封鎖がそれであった。即ち、米、英、支、蘭4カ国がわが国との貿易を断絶して、軍事資源、特に鉄鉱、石油等の流通を封止し、更に日本の在外資本を封鎖圧迫して、わが国が止むに止まれず立ち上るようにしむけ、同年11月26日の野村、来栖両大使とハル國務長官との会談においては、わが国の決起を決定的とするための、いわゆるハル・ノート突き付けたのであった。ハル・ノートの条文の概要を示すと、

- (1) 仏印中国から一切の軍及び警察力を速かに撤退させよ。
- (2) 日支両国間だけの緊密を図る条約を放棄せよ。
- (3) 日独伊三国同盟を死文化せよ。
- (4) 重慶政権以外の中国政権はこれを認めない。

という真に挑動的な条文であった。

12月1日14時、開戦の聖断を仰ぐ最後の御前会議が、宮中東一の間において開

催されたが、その席上原枢府議長は会議の締めくくりとして、大要次のような所見を述べた。

わが国は、対米交渉については、譲歩に次ぐ譲歩を以てし、平和維持を希望した次第であるが、意外にも米国の態度は徹頭徹尾蔣介石の言わんとする所を言い、従来通りの理想論を述べるばかりで、その態度は唯我独尊、頑迷無礼、甚だ遺憾とする所である。

かくの如き態度はわが国として、どうしても忍ぶべからざるものがある。若しこれを忍ぶとしたら、日清、日露戦役の成果をも一擲することになるばかりでなく、満洲事変の結果をも放棄しなければならぬこととなり、なんとしても忍ぶべからざる処である。

丸40年以上の支那事変を克服してきた国民をして、更にこの上の苦難に堪えしめることは、誠に忍び難いと考える。然しながら今やわが国の存立は脅かされ、明治天皇の御事蹟をも全く失うことになるのであって、このうえ手を尽すも無駄であることは明かである。従って御前会議決定通り開戦も止むなき次第と思ふ。

(中略)

国民はこの立派な国体の下にあって、精神的には他に比類のない優秀さであることは疑はない処であるが、戦争長期にわたるときは、時として考え違いのものもあり、又敵国の策動も絶えず行われ、内部的崩壊を企図するであろう。尙愛国心に燃えているものでも、時としてこの内部的崩壊を企図することがないとも限らない。この点を最も憂うべきであると思ふ。開戦は今日の情勢上誠に止むを得ぬことであり、誠忠無比のわが将兵を信頼するのほかはないと。

ことここに至って、わが国積年の悲願であった大東亜共存共栄の努力も水泡に帰したばかりでなく、わが国の存立も危うくなってきたので、遂に「今や自存自衛のため断然起って一切の障碍を破砕せん」と断固として同年12月8日、米、英、蘭に対して宣戦を布告した。

第2節 沖縄へ転進

昭和19年6月15日、第9師団(長、原守中将)は先に述べたとおり釜山に集結するように命ぜられたが、その行方は全く不明であつた。日清、日露の戦役以来、精鋭第9師団と称えられた伝統ある郷土部隊は東満の地に永久駐とんする決意を抱いて滯留しただけに、今この地を後にすることは感慨無量のものであつた。40年住みなれた牡丹江は第2の故郷以上の郷愁を感じずにはいられなかつた。官庭に建立された神社もきれいに掃き清められ、僅かばかりの庭園もきれいに夏草がむしり取られ、紅のケシの花が目にしみた。兵士の中には、“またくる日まで”と庭石に刻み別れを惜むいじらしい姿も見られた。誰ぞ知る、この永久の別れを。

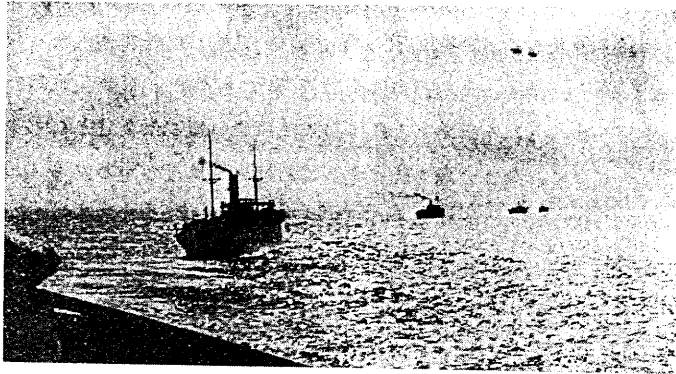
かくて師団隷下諸隊は、続々と釜山に集結した。釜山はこのため、異様な緊迫感がただよい、将兵の顔にも堅い決意がうかがえ、悲壮な気迫がみなぎっていた。

7月1日夕刻、師団将兵を乗せた輸送船は、釜山港の岸壁を離れた。

牡丹江出發以来、行先はサイパン島だ、或は硫黄島だ、いや比島だと尽きぬ噂を乗せたまゝ輸送船は亞朝門司港に寄港した。ここで漸く第9師団は、南西諸島に上陸することが伝わり始めたが、上陸地名は依然として不明であつた。輸送船は九州沿岸をひたすら南へ南へと船足を速めていた。九州沿岸を左手に見ながら進む安心感に船内は穏やかな空気に包まれ、遙か彼方にゆるぐ九州の山野、町々の灯は波間に点滅して、いかにも平和な日本の姿のようにうつて見えた。やがて九州の南端鹿兒島港にさしかかると、右手に勇大な桜島の噴煙が軽やかに冲天にたなびいており、息づまる船中にひしめく将兵も、この絶景に生気を取り戻しながらも、どこか心の片隅には、行方も知れぬ南海の孤島への船路の不安と、今離れようとする祖国への郷愁とが入り混り、何ともいえない深い感傷に陥りながら祖国の安泰と家族の無事を祈り続けた。

停泊すること僅か数時間、桜島の噴煙が夕闇に吸い込まれていく頃、輸送船は滑るように鹿兒島港を後にした。再びわが祖国の土を踏むことができるであろうか。輸送船は大平洋の荒波にもまれた。右に左に15度のジグザグ航海が始まった。僅か9ノットの船足ではあつたが、いつの間にか種子島、屋久島、奄美大島、徳之

島を過ぎ、遂に洋上の浮島も見えなくなった。



輸 送 船 団

この間対潜訓練、対空訓練が繰り返えされたが、これらの訓練は慣れない船中に閉じ込められた将兵の健康保持にも役立った。輸送船は7~8000吨であったが、搭載量を遙かに越え、船倉は勿論、中、上甲板のデッキまですし詰めであった。

どんな激烈な戦闘にもおくれをとらなかつた将兵も疲れ切っていた。徳之島を過ぎた頃、「第9師団は沖縄守備の任に着くと初めて転進の大命をうけ、目的地が明らかになった。まさか沖縄、それも日本の領土の守備につこうとは誰も想像していなかった。それだけに又戦局は重大な事態に直面していることが察せられたが、折しもサイパン島の壮烈な玉砕の悲報がもたらされてきた。わが将兵はこの悲報によって初めて敵が既にわが目前に迫りつゝあることを知った。

釜山を出港して12日目の朝、監視兵が「船首前方点影見ゆ」と報告してきた。「すわ敵艦ノ それとも」と、一瞬緊張したがその点影は次第に大きくなり沖縄本島に変わっていった。

船上の将兵は感無量の喜びにしばし放心していた。それもその筈、師団将兵を乗せた輸送船12隻が、米潜水艦にも飛行機にも一度も発見されることなく無傷で東支那海を横断し得たのは当時の状況においては、全くの奇蹟であった。

7月12日10時、わが輸送船団は、那覇港に入港した。緑におおわれた島、ま



武 装 し て 上 陸 を 待 つ 部 隊

ばゆいばかりに映える島。蘇鉄の林立がこれを遠望する将兵を南国情緒に誘っていく。師団将兵が続々と上陸を始めると、那覇港は一挙に活気を呈し沖縄住民は日本陸軍における精鋭第9師団の名をよく知っており、100万の大軍を迎えた喜びようであった。当時沖縄は、沖縄本島に海軍基地、航空基地が設けられ、主として海軍部隊が駐屯しており、陸軍部隊としては、沖縄及び石垣島に各1個旅団が駐留していたに過ぎなかった。従って沖縄の防備に関する施設は殆ど見るべきものもなく、全く無防備に近い状態であった。

揚陸作業は極めて規律正しく、整々と短時間に終わった。これは暁部隊の活躍もさることながら民間の協力もまた大きかったが、それにもまして、師団将兵は「トラック島、サイパン島の二の舞をしては大変だ」を合言葉に、トラック島、サイパン島のように揚陸後海岸に集積していた戦闘資材を米機動部隊によって、一挙に爆破されて、戦闘力を喪失し、玉砕を早からしめてはならないと、敵前上陸同様の真剣さで必死の活躍を続けたのであった。

将兵の脳裡には、この戦訓が焼きついていた。

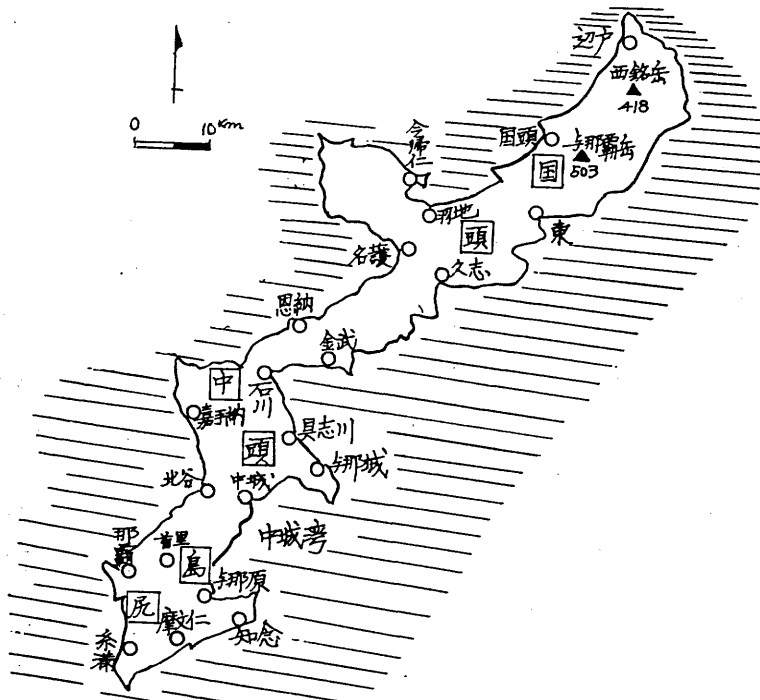
第3節 沖縄防衛

沖縄本島は、日本列島と台湾とを連鎖して大陸の防波堤の形をなす南西諸島の中

心であり、本島に連なって宮古島、石垣島、徳之島、伊江島の沖縄列島も、飛行場適地として、戦略上の要衝であった。

沖縄本島の北部は国頭郡、中部は中頭郡、南部は島尻郡と呼び、国頭郡は山岳重畳の山地帯で人間にたえれば頭部に当り、中頭郡は平坦地が多くいわば心臓部に当るといえよう。本島唯一の飛行場があり、又中城湾を擁しており、その中城湾は、沖縄列島屈指の軍港で当時、日本聯合艦隊全部を収容して尙余りありと伝えられていた。

沖縄本島概要図



本島南部は丘陵地帯で主として甘薯畑が多く砂糖の生産を生業とし、糸満町は世界的な漁港でもあった。

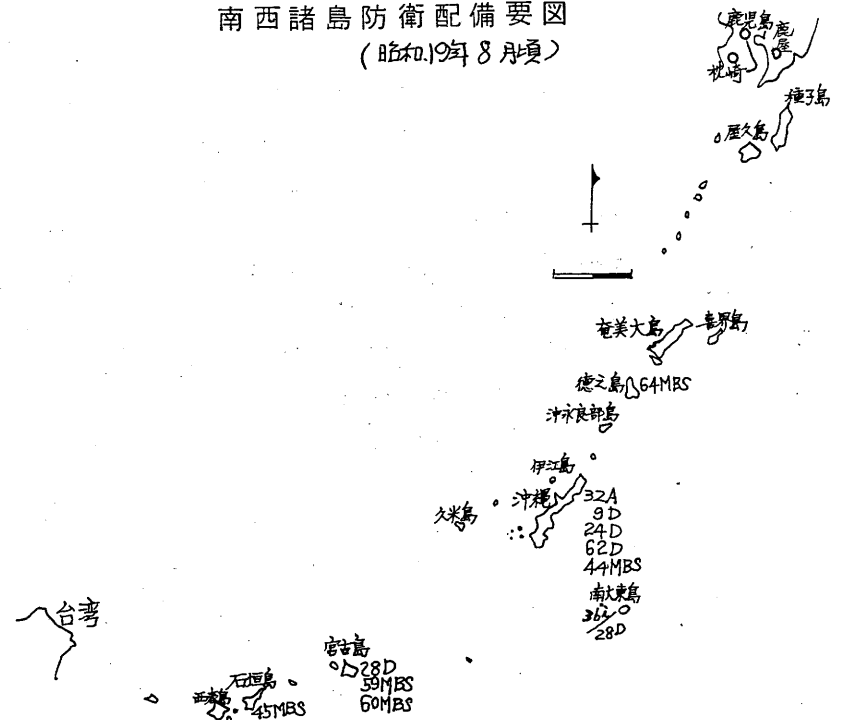
当時の沖縄列島及びその周辺における戦備の概況を述べると、大本営は、わが本

土及び南方地域が東方から敵の脅威を受けることになったので、本土と南方との連絡拠点の要衝となった台湾及び南西諸島を速かに強化する必要に迫られ、昭和19年3月22日台湾軍の戦闘序列を下令して、作戦任務を付与すると共に、南西諸島に大本営直轄の第32軍を新設した。

この新設第32軍もその兵力は奄美大島、中城湾及び船浮の各要塞部隊に過ぎずその作戦任務も「10号作戦準備」と呼ばれて、航空作戦の基盤造成を最優先とし、敵の奇襲に対応出来る戦闘態勢を整えて、本土と南方圏との交通確保を目的とするものであって、地上作戦準備は第2義的のものとされていた。

ところが6月に至って、サイパン島が玉碎し、次いでわが聯合艦隊の「あ」号作戦が失敗に帰したため、速かに南西諸島及び台湾方面が敵の次期攻略目標となる公算が大きくなってきた。

南西諸島防衛配備要図
(昭和19年8月頃)



ここにおいて大本営は、急いでこの方面に兵力を増強したので、現地の陸上兵団は鋭意作戦準備に狂奔することになった。第32軍は5月5日西部軍司令官の隷下に入ったが、次いで7月10日、台湾軍の戦闘序列に編入された。当時第32軍の旅団以上の配備は次のとおりであった。

第32軍（軍司令官、渡辺正夫中将、8月11日以降牛島 満中将）

- 独立混成第44旅団（沖縄） 5月3日上陸
- 独立混成第45旅団（石垣島） 5月3日上陸
- 第9師団（長、原守中将）（沖縄） 6月26日上陸
- 第28師団（長、榑淵鐘一中将）（宮古島、一部南大東島）
6月30日上陸
- 第24師団（長、雨宮巽中将）（沖縄） 7月18日上陸
- 第62師団（長、本郷義夫中将）（沖縄）
7月24日上陸
- 独立混成第64旅団（徳之島） 7月20日上陸
- 独立混成第59旅団（宮古島） 7月24日上陸
- 独立混成第60旅団（宮古島） 7月24日上陸

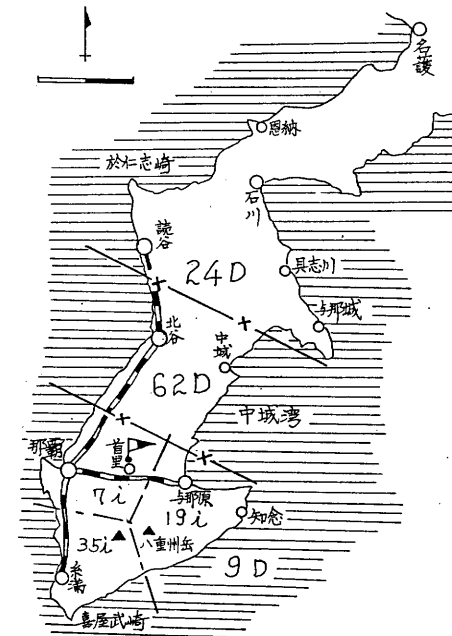
注 第28師団及びかつて姉妹聯隊であった歩兵第36聯隊は、沖縄中城湾より余那原に上陸し、那覇港から機帆船で師団主力は宮古島へ、歩兵第36聯隊は南大東島へ出帆し、それぞれ孤島守備についた。一部の初年兵は別として古くからの将兵の心には、かつての姉妹聯隊のつながりの深きを喜ぶとともにお互いの武運の幸多かれと祈ったことであろう。

歩兵第36聯隊将兵は昼夜兼行陣地構築に明け暮れたが、補給を断たれ、爆破用の火薬欠乏したので敵の艦砲射撃の不発弾を収集して、その火薬を抜きとって作業を続行した。

第9師団が那覇に上陸した頃は、沖縄守備といっても陣地は全くなく、無防備のものであった。「これでよいのか、敵は既に目撃に迫っているではないか、内地部隊はたるんでいるぞ」と将兵は口こそ出さなかったが誰もがそう感ぜずにはいらなかった。それというのも日本の生命線東満国境の守りも堅く、連日連夜陣地構

築と猛訓練に明け暮れた関東軍の精鋭師団であり、又全陸軍切っ手の精鋭師団であると自負していた将兵であっただけに、熱烈な愛国の至情と、軍人としての強い責任感が、そのように感じさせたのであった。師団は直ちに司令部を首里におき、歩兵第7聯隊を首里南方の南風原から大里地区に、歩兵第19聯隊を東風平地地区に、歩兵第35聯隊を南部島尻地区に配置し、それぞれ陣地を構築することとした。

沖縄守備要図



将兵は長途の船旅に次いで、休む暇もない揚陸作業に全く疲れ切っていた。然し戦況は将兵に休養を与える余裕を許さず各隊は直ちに所要の陣地偵察に着手した。伝統に輝く第9師団とはいえ、今の今まで大陸作戦、それも向うところ敵なしの攻撃しか知らない、いわば陸の精鋭であったが、今はこの沖縄本島で米大機動部隊を迎え撃つという島嶼作戦に変わり複雑な気持ちにかられていた。

師団は大本營の「島嶼守備要領」に基づいて島嶼作戦を準備したが同要領は次の点を強調していた。

- (1) 陣地そのものは激烈な砲撃に堪え、しかも長期持久に適するように編成設備する。
- (2) 陣地は通常、水際陣地、拘束陣地、主陣地、複郭陣地を構築する。
- (3) 陣地を利用し、あらゆる手段を尽して上陸部隊の戦力を滅殺し、好機に乗じて一挙に敵を撃滅する。

第9師団は、先ず沖縄南部の陣地構築に着手したが、これは水際撃滅に備えようというものではなく、当時何一つとして陣地らしいものもなく、米軍はいつ進攻してくるか判らない情勢にあったため、先づ何よりも拠り所となる陣地を構築することとした。

一方第32軍司令部は、沖縄本島に対する米軍進攻判断について真剣な検討を続け敵の主攻局面については次の数案を想定していた。

第1案 嘉手納正面

第2案 牧湊南方～那覇北方正面

第3案 小緑地区

第4案 与那原正面

第5案 米満、米須正面

然し沖縄本島の南部は到る処敵来攻の可能性を有する地点が多々あった。

軍は慎重審議の結果第1案の嘉手納が最も有力な上陸地点であると判断していた。

米軍の予想上陸地点は一応まとまったものの、軍司令部の作戦室は重苦しい空気に包まれていた。それは水際撃滅か、内陸決戦か、両者の論議は真っ向から対立していたからである。軍司令部は那覇市首里の中間にある県立高等女学校に位置していたが、将官等の出入りは日を追って激しくなり、どの顔も苦悩に満ちていた。

牛島軍司令官は対立する両者の論議を静かに見守っていたが、長勇参謀長は語気も荒々しく、内陸決戦論を主張していた。「即ち米軍が上陸して橋頭堡を築こうとするまでは沈黙し、敵の態勢のまだ整わない混乱の時を狙って一挙に総攻撃を実施して敵を全滅する」という主張を一步も譲らなかった。

第9師団においては、師団長以下聯隊長も悉く長参謀長の意見には反対であった。



米満中央台で作戦会議（牛島軍司令官に状況説明）

特に原師団長は「米軍を一步でも上陸させることは許されぬ。敵の上陸はわが軍の敗退をもたらすものであり、砲まで水際で、徹底的に叩いてこそ勝利の道が開かれる」という強い信念を堅持していた。師団長は日本国土に米軍が歩をしることには堪えられないといわんばかりの悲壮な面持ちであった。

師団将兵には事実それだけの気迫がみなぎっていた。全滅とまではいなくても、壊滅的大打撃を与えうる自信があった。師団の陣地構築は、その強度と進歩状況といふ常に他師団を押し、軍司令部からその作業振りを再々視察にくる程であった。当時島嶼作戦においては水際撃滅か、内陸決戦かで現地において論議の起るのには当然であった。即ち、日本陸軍が建軍以来初めて体験しようとする島嶼作戦であり、しかも物量を誇る米軍の上陸に対する戦闘であったが当時中央においてすら思想の統一が殆ど行われておらず、現地部隊に対する指導も区々であった。従って当時この二つの意見の対立は、沖縄守備隊ばかりの問題ではなかった。かつて北仏海岸の独軍防衛の際ロンメル元帥は、水際撃滅主義を唱え、 Rundstedt 元帥は後退配備撃滅主義を主張して激しい論争を展開し、結局ロンメル元帥の水際撃滅主義によって作戦が指導された戦例もある。

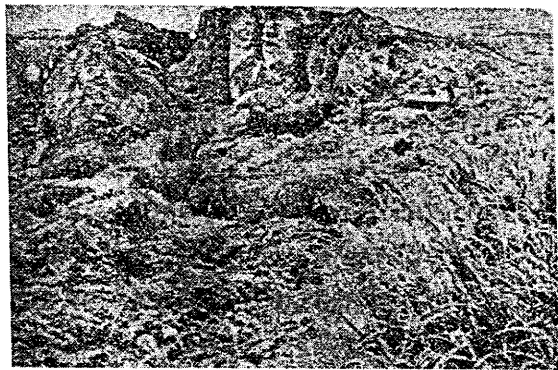
軍は上記のように迂余曲折はあったが、サイパン島の戦訓（水際陣地は艦砲射撃

によって木っ葉微塵に壊滅した)及び大本営の指導もあり、島嶼作戦方針を次のように定めた。

「軍は主陣地を水際から離れて構築し、海上、水際、海岸で敵に大きな損害を与えた後好機を捉えて一大攻撃を加え敵の死命を制する」と。即ち軍は後退配備をとった。然し第9師団は、水際撃滅の主張を曲げなかった。

師団の陣地構築は、水際撃滅に備えて、米軍上陸予想地の海岸には堅固な洞窟陣地を作るのに汗水を流していたが海岸の至る処にサンゴ礁があり作業は真に困難を極めた。

一方、南部山岳地帯においては、主陣地の構築にこれ又懸命の作業が続けられていた。将兵達は作戦上の思想の対立等を知る筈もなくただ神州不滅を信じ、必勝を期して、ひたすら、陣地構築に明け暮れていた。



かつての敵戦地

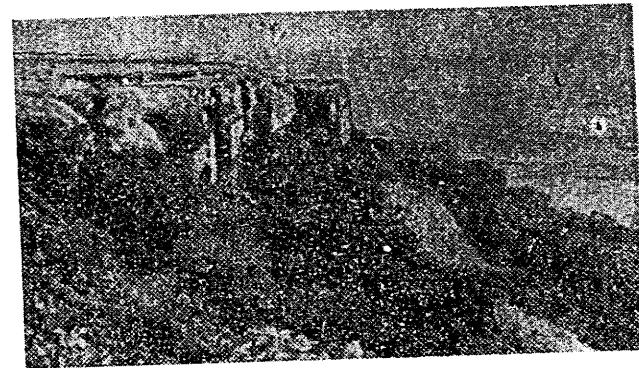
長参謀長の主張も決して間違っていた訳ではなく、大陸における実戦を通じ、又南方諸島における島嶼守備の幾多の戦訓から発したものであった。大本営の後退配備撃滅主義も水際戦闘を捨てた訳ではなく、水際戦闘に機関砲の威力を重視し、これを海岸線に配置すべしと指示した程であった。

19年9月、上陸以来早や2カ月、暦の上では秋となったが、沖縄はまだ真夏の太陽がキラキラと輝いていた。連日連夜の陣地構築も漸く概成の域に達していた。

然し当面の戦局は、日一日と不利深刻の度を増すばかりであった。

小笠原諸島からマリアナ群島を経て、パング海に及ぶ絶対国防圏は既に、マリアナの一角において破れ、又わが海軍が、この一戦に大きな損耗を受けたことは、日本の戦略態勢を一変させた。

絶対国防圏内の諸海域は敵の跳梁に任せ、本土と南方諸地域とは将に分断されようとし、敵のフィリッピン攻略作戦を極めて有利にし、又マリアナを基地として日本本土爆撃を可能にし、直接本土上陸作戦も不可能ではない情勢となった。このため日本は本土、台湾、比島を連ねる線において、敵の本格的な来攻を迎えねばならない事態に直面した。



摩文仁の巖頭

当時敵は新しい戦略を用いてきた。即ち、従来は基地航空の威力圏内に次の上陸地点を選定し、極めて慎重な反攻作戦をとっていたが、マリアナ作戦においては、基地航空の威力圏外遙か前方において、強力な機動部隊及び陸海軍の協同による大躍進作戦を実施した。

大本営はかかる情勢に対処するための決戦計画として捷号作戦を準備中であったが、その要旨は次のとおりであった。

- (1) 比島より、台湾、南西諸島、本土を経て、千島に亘る海岸第1線の防備を強化する。
- (2) この諸地域の何れに敵が来攻しても、随時陸海空の戦力を結集して迎撃しこれ

を撃砕し得る準備を整える。

(3) これを「捷号作戦」と呼称する。

この決戦計画は、連合軍が、比島、台湾、南西諸島、本土の何れかに来攻するものと判断して計画されたものであり、敵の上陸部隊を先ずわが海軍及び陸、海軍航空部隊によって海上に撃滅し、更に上陸してくる敵に対しては陸軍部隊を以てとどめを刺そうとする構想であった。この中で大本営が最も重視したのは、比島（捷1号作戦）と南西諸島（捷3号作戦）であった。

沖縄の第32軍はこの「捷3号作戦」によって死生を決する運命にあった。

沖縄本土は南北120軒、東西7~10軒にして、僅か3個師団で守備するには余りにも廣大過ぎた。

軍司令部は、大本営の企画に基づいて概要次の如く作戦計画を決定した。

- (1) 沖縄本島においては決戦を企図し、他の島嶼においては持久に専念する。
- (2) 沖縄本島の守備は島の南部に重点をおき、米軍の上陸地に全兵力を集中して一挙にこれを撃滅する。
- (3) 米軍の上陸予想地点は小祿、牧湊、嘉手納の三正面が公算大である。予想上陸正面にそれぞれ第9師団、第62師団、第24師団を予め配置し、敵の上陸に際しては、その当面の師団は敵をその橋頭堡に阻止し、その他の師団は、敵の上陸正面に戦力を集中し、上陸第2日の前半夜、軍師団砲兵の全力を以て橋頭堡撃滅射撃を実施した後これに引続いて後半夜、歩兵部隊を以て大攻勢に転じ、上陸した敵を海岸において全滅する。

第9師団は、軍の作戦計画に基づいて、師団司令部及び歩兵第7聯隊本部を首里市の師範学校に、歩兵第19聯隊本部を目取間に、歩兵第35聯隊本部を糸満町におき本島南部地区の防備をますます強化することにした。

沖縄防衛に方り特に懸念されたことは、米軍が上陸後、一挙にわが水際陣地を突破して、主陣地砲兵陣地に殺到することであったが、軍司令部はその点歴戦の武勲に輝き粘り強い精強第9師団に全幅の信頼を寄せていた。特に水際において敵を阻止できるか否かは対戦車戦闘の成否に懸っていたが、第9師団将兵は東満で鍛えに鍛えた対戦車肉薄攻撃訓練が、よもや沖縄の地において、しかも国の運命をかけた

決戦に役立とうとは考えもしなかった。それだけに第9師団に寄せられた期待と重責には師団将兵齊しく血湧き肉躍るものがあり、洞窟陣地、タコソボ掘りのかたわら対戦車肉薄攻撃の訓練はそれこそ死力を尽しての猛訓練が繰り返えされた。

歩兵第35聯隊の野口小隊長は、科学的センスのある人であった。旧富山薬専を卒業いらいどこへ行くにも体から計算尺をはなしたことがなかった。

歩兵第35聯隊に入隊時も決して忘れなかった。それがこの沖縄の戦場でこんなに役立とうとは野口小隊長自身も考えていなかった。洞窟陣地づくりに機械らしいものといえば、平盤測定器ひとつがあるだけで、殆どが“勘”を頼りの原始作業に各部隊は手をやいていた。しかし野口小隊長だけはゆうゆうと、しかも坑道づくりに、少しの狂いもなく坑道をつないでいく正確さにみんな驚いていた。これも計算尺のおかげであった。このことが奥聯隊長の耳にはいった。

「計算尺をもって坑道の能率をあげ、その正確さと将兵のいたずらな労力をはぶいたことは他部隊の範なり」として聯隊長は賞詞をさすけた。

聯隊長は型破りな軍人であっただけにその表彰においても機敏な行動、奇抜なアイデアにたいしては特にほめちぎった。

計算尺による仕事の能率よりも、平常必要としない器具を用意周到に備えているその心構えに感心したのである。それが坑道づくりばかりでなく、対戦車訓練にとっても大きな役割りを果たした。50屯級の重戦車といえば鋼板は15種もある。これを撃破するには、ここでも計算尺が10軒強の火薬をもってすべしとはじきだした。これを最も効果的に戦車に投げつけるには、戦車のスピードと投げる位置いかんが成否のカギだ。何米接近がよいか、さらには導火線の長さには戦車のスピードを計算にいれないとムダ骨になる。ことに経験や訓練の浅い初年兵にとっては“勘”にも頼れない。野口小隊長は計算尺でこれもたちまちはじきだした。平たん地の場合、坂の場合とそのこう配の緩急度合いなどことこまかにあらゆる想定のもとに導火線の長さや点火時間までを一覧表にして科学的な対戦車攻撃に備えたのであった。科学する心の尊さを、ひしひしと感ぜずにはいられない。

ところが9月中旬突然大本営から「第32軍は飛行場建設作業に全面協力すべし」との命令を受けた軍は、沖縄不沈大空母建設という建前のもとに飛行場の突貫作業

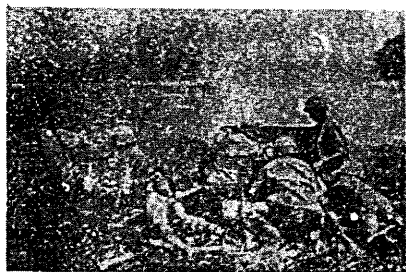
に移り、9月15日、第9師団から約3,000名が中、北飛行場建設に動員され、第24、第62師団もこれに協力し、両飛行場は10月上旬ほぼ完成するに至った。



沖縄を目差すグラマン

10月10日7時、沖縄は初めて敵グラマン10数機群の執拗な波状攻撃を受け漸く完成した北、中飛行場は覆滅され、又那覇を始め小祿、与那原、糸満町も天を焦す火柱に焼け落ちてしまった。沖縄県民はこののろわしい日を「10・10空襲」と呼んでいた。

第32軍は、この日以来、第1線の非常態勢をとり、又沖縄住民も続々と勤労奉仕隊を組織し、陣地構築に、補給支援に、積極的に参加し、軍官民渾然一体となった作業が展開された。



一発必中の願いをこめて



水際で猛烈な戦闘訓練

軍は陣地構築のかたわら、牛島軍司令官の統裁のもとに、実戦さながらの猛訓練がたて続けに強行された。各師団毎にそれぞれ米軍上陸予想地点に急拠兵力を結集する行動、橋頭堡に対する夜襲、及び砲兵隊の橋頭堡殲滅射撃等秒を読むような綿密にして組織的な演習であった。

師団将兵は連日連夜の激しい訓練の積み重ねによって、沖縄決戦に勝利の自信を抱くようになり、軍司令部も前途に自信と光明を見出し始めていた。



必勝を祈念しつつ猛訓練

第4節 台湾防備の命下る

11月3日、第32軍司令部は突如台湾軍司令部から「台湾の第10師団と機動師団は、既に比島に転用されたので、台湾の兵力は僅か3個師団となった。よって第32軍から1個師団を台湾の防備に当てる」旨を伝達してきた。

軍司令部は総立ちになる程の異常な衝撃に打ちのめされ、牛島軍司令官、長参謀長、及び高級参謀は早速協議の上、下記2項目を骨子とする意見書を作成してこれを台北にある台湾軍司令部に届けた。

- (1) 若し、第32軍より一兵団をひき出される場合は、沖縄の防衛に関し軍司令部は責任を負えない。
- (2) 軍としては、一兵団を抜かれるぐらいなら、むしろ軍の主力を以て国軍の決戦場である比島に馳せ参ぜんことを希望する。

然し意見書は台湾軍司令官の容認する所とはならず、遂に11月13日、次の如き大本営命令が下達された。

「沖縄にある兵団中最精鋭師団を抽出するに決せり。選定は軍司令官に一任す。」

第32軍は最早一縷の望みも断たれ、万事休した。

当時第32軍は主要陣地の構築を概ね終り、今は水際撃滅戦法の猛訓練によって

自信を強めていた矢先であり、将兵の間にも何時しか転進の噂が流れ始め、又沖繩住民の間にも噂が大きく拡がり始めていた。

さて精鋭師団といえば第9師団か、第24師団か、第9師団は伝統古く、歴戦の経験とその勇武においても軍の誇りであった。第32軍にとって今第9師団を手放すことは、致命的な打撃であり、軍司令部首脳は苦悩は察するに余りあるものがあった。

昭和19年(1944年)11月17日、遂に第9師団を台湾に転進させよとの大本営命令が下達された。

第32軍はこの決定によって沖繩防衛計画を変更せざるを得なくなった。軍は直ちに新作戦計画を練り次の4案について検討を進めた。

- (1) 従来の決戦主義を維持し、全兵力を上陸地に集中し、橋頭堡において敵を撃滅する。
- (2) 北、中飛行場地区に主力を配し、嘉手納湾からの上陸米軍の前進を食い止める。
- (3) 島尻郡に主力を配し持久出血作戦を行う。
- (4) 軍は主力を以て北方国頭地区に転進し、一部を以て伊江島及び北、中飛行場の使用を妨害する。状況止むを得ないときは国頭山岳地帯にこもり長期持久を策す。検討の末結局第3案を採用することとなったが、その構想を若干詳しく述べると次のとおりである。

宜野湾東西の線以南の島尻郡に主力を配置して、その沿岸に上陸する米軍に対しては、その橋頭堡において撃滅を図り、北方嘉手納湾に上陸後南下する米軍には首里北方陣地において持久出血作戦を行うという悲壮なものであった。

即ち米軍の上陸する公算最も大なりと判断する嘉手納正面における阻止作戦を断念し、南部島尻において持久出血作戦を企図するものであり、今までは殆ど考えられなかった策案であった。

第9師団の転出に当って師団将兵には大きな心残りがあった。それは転進命令が余り急であったため、陣地の引き継ぎが十分出来ないことであった。大小の陣地とその周辺の地形を画いた要図を手渡しての机上の引き継ぎが精一杯であった。蜂の巣の如く複雑巧妙に掘り巡らされた島尻一帯の陣地はあらゆる機智と創意を働かせて

構築した陣地であり、又敵の目をくらす秘匿陣地であったので、隅から隅まで引き継ぐ必要があったがその余裕がなかった。

沖繩決戦時には敏速な陣地転換や局地的後退作戦を余儀なくされることは必至であり、そのためには坑道と坑道のつながりを周知徹底しておかなければ大混乱を来す恐れがあった。坑道式陣地を実際に役立てるためには現地踏査による引き継ぎが絶対に必要であった。又洞窟守備に欠かすことのできない水の在り場所を始め、部落へ通ずる退避坑道等数え上げればきりがなかった。

果して交代部隊は、この地形、地物、そして陣地を100%生かして米軍を迎え撃つことができるであろうか。師団将兵は沖繩住民を置き去りにする心苦しさと共に二重、三重の苦悩に心を痛めていた。

12月20日、師団各部隊は那覇港に逐次集結を開始し那覇港付近において天幕露営が始まったが、重苦しい日々連続であった。去る7月上旬、この港に第1歩を印したあの日の湧き返る歓迎の嵐に包まれた感激の日を思い浮かべ今將に沖繩を去るとする将兵は断腸の思いであった。年も押し迫った28日、離島の日がきた。

原師団長始め隷下部隊長は離島に先だち軍司令部を訪れ、牛島司令官及び主要な幕僚と会見し、別れの宴に臨んだ。その席上、原師団長は声を震わせ、万感胸に迫る思いで、大要次の如き訣別の辞を述べた。

「死に場所として構築した陣地を後にして今新たな任務につくことは残念でならない。沖繩を去ることは後ろ髪を引かれる思いである。目的地に着いたならば伝統ある師団の歴史に恥じないよう一丸となって任務を完遂する。軍司令官閣下にはますます御健勝で国土防衛の大任を果たされるよう武運を祈る」と。

ジーンと目を閉じてこれを聞いていたあの温顔、慈父の如き牛島軍司令官の両眼から涙が頬に伝はったが、敢えてこれを手で拭くおうともせず、微動だにしない軍司令官。その胸中はいかばかりであったであろう。

第5節 台湾防衛

昭和19年12月28日、第9師団将兵を乗せた輸送船団は、那覇港を相次いで出帆し重い船足で危険海域を南下していった。一部の上級将校を除き大部分の者は

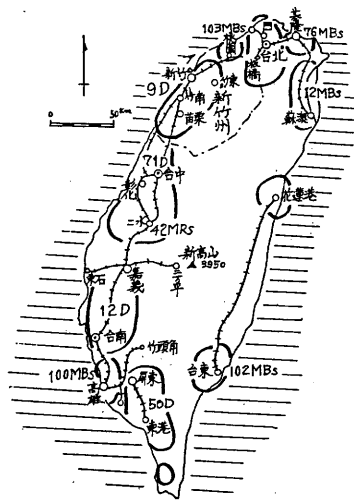
比島方面に転進するものと思っていた。

30日、船団は無事港にはいった。予想外に早い入港、しかもその港が台湾の基隆港であると聞かされた将兵は重ねて驚いた。しかし敵機の来襲は頻繁を極め揚陸作業は、敵前上陸以上のあわただしさであった。翌31日、休む暇もなく揚陸作業は続けられ、夕刻までには一切の揚陸を終った。

師団将兵は昭和20年の元旦を基隆の小学校で迎えたが、守備地区への出発準備が大重であり、元旦を思い起す余裕などなかった。

第9師団は新竹州の守備に任ぜよとの軍命令を受けていた。2日早朝、師団が新竹市(台湾西北部)に向い出発しようとした時、又もやグラマママの大編隊は、基隆港一帯に來襲した。基隆守備の高射砲、機関砲は一斉に火を吹いたが、グラマンも執拗に攻撃を反覆し、わが師団将兵を輸送し終った船団を始め大小艦船は、次々と炎に包まれていった。しかし、師団の兵器、弾薬、その他の資材は当初から悉く分散

台湾警備概要図



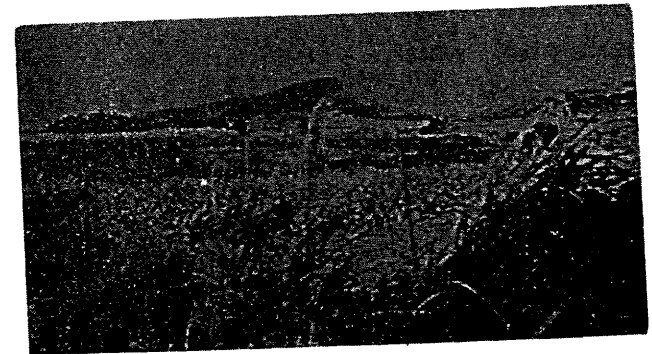
してあったため、損傷は極めて軽微であった。師団は直ちに新竹市に向い急進し、師団司令部を新竹市におき、翌日早くも陣地構築を開始した。沖縄において、半歳にわたり明けても暮れても陣地構築のため、師団将兵の陣地構築手順は極めて鮮かなものがあつた。しかし将兵の手のひらは誰もがママというような、なまやさしいものでなくタコだらけに変化していた。

陣地構築間の小休止に何時も出る話題は「沖縄は今どうしているであろうか」「われわれが構築した陣地をうまく利用してくれているであろうか」という第32軍と沖縄住民に対する心残りであった。

3月24日、米軍は大挙して慶良間に上陸を開始し後、沖縄本島には連日彼我の激闘が続いた。

4月1日、米軍は更に嘉手納湾に上陸を開始した。第9師団将兵は、つい最近までかの地で一大決戦を覚悟し、水際において敵を撃滅すると主張し続けていただけに、今台湾で沖縄の戦況を地図上に展開して、新聞やラジオによりわが方の損害苦戦を見聞するたびに歯ざしりし、真に断腸の思いであつた。

5月14日、敵は那覇の一角に突入し、更に首里に進撃したため、第32軍司令部は止むなく摩文仁に転進した。摩文仁一帯の陣地は、わが第9師団が昼夜兼行、骨身を削って構築したものであり、師団将兵は、明けても暮れても全くいたたまれない日の連続で、許されることなら、今すぐにも沖縄の救援に飛んでいきたい心境であった。



摩文仁を望む

6月22日3時、牛島軍司令官は、長參謀長とともに摩文仁の洞窟において割腹し果てたとの報に接した第9師団将兵は男泣きに泣いた。

牛島軍司令官辞世の歌

秋をまたで、枯れゆく島の青草は、皇国の春に蘇へらなむ。

矢弾つき、天地染めて散るとても、魂かえり魂かえりつつ皇国まもらむ。

第6節 戦争の終結及び復員

昭和20年8月15日は、悲涙にむせんだ運命の日であった。第9師団将兵は、神州不滅を信じ、断じて祖国を守る熱烈たる愛国の至情に燃え、昼夜兼行黙々として陣地構築に精進していた。

突然「本日正午、天皇陛下の重要な放送がある。全将兵は謹聴せよ」と各隊に伝達された。

師団将兵はよもや無条件降伏とは夢にも思わず、様々の想像を巡らしていたが、大部分の者は「いよいよ本土決戦だ」と決意を新たにしていた。

正午、将兵は整列して、戦争終結の玉音を聞いたが、雑音が多く十分聞き取ることはできなかった。然し何かが起っているということだけは知ることができた。

第9師団長は、正式の命令あるまで現任務を続行するに決し、引き続き師団全将兵を挙げて陣地構築を続行した。然るに3日後の18日正式に停戦命令に接し、又連合軍側の蒋介石軍は軍旗の引き渡しを命令してきた。

8月23日は、歩兵第19聯隊にとっては忘れ得ぬ軍旗祭の日であった。たまたま昭和20年は、軍旗親授の日から栄光60年、還暦の軍旗奉祝の年に当たっていた。然し今ここに軍旗祭を挙行すべきか否かについて連隊本部では苦慮していたが、師団長から「心から奉祝せよ」との激励を受けたので、心機一転挙行することとした。

昭和20年8月23日、快晴、思い出深い264高地において、師団長以下れい下各部隊長参列のもと、9時開式厳肅悲痛の裡に式を終了した。引き続き第1大隊長藤田大尉の指導する谷地を隔てた隠見目標に対し小銃、機関銃による実弾射撃を実施し、渡台以来最初にして最後の壮絶な銃声を轟かせた。その壮絶な銃爆音は山彦と

ともに山野に木だまして痛快極りないものであった。次で第3大隊長関根少佐の行司によって中隊対抗相撲競技会、第2大隊長出口大尉の審判による銃剣術競技会を実施し、将兵はすべてを忘れ競技に声援に打興じた。正午は聯隊本部竹舎に来賓を招待して、全将校参加のもとに祝宴を開き、一同謹んで軍旗の栄光を欽仰した。午後は、通信中隊長小森大尉の考案によって、狭少な地形を巧妙に利用した演芸会場において、関根大隊長の統轄指導のもと、各中隊単位毎に創意工夫をこらし活気にあふれたまことに千変万化の熟演をくりひろげ、爆笑拍手は日没に至るも鳴り止まず、将兵は千載一遇の名残りであることを思い夜に入るも続行した。まことに栄光60年の軍旗祭にふさわしく、又感慨一入深い一日であった。

9月3日、赫々たる武勲と伝統に輝く師団れい下部隊の軍旗は、当時方面軍司令部の位置していた台北大学に集められ、方面軍司令官立会のもとに奉焼され永遠にその姿を消したのであった。

9月上旬、台湾に進駐した蒋介石軍により、師団は武装を解除され、竹南付近に集結して、自活態勢を整え連合軍の指示する諸作業に従事した。

同年暮、師団は内地帰還の命令を受けて基隆に集結し、翌21年1月3日から3月にわたり、逐次、基隆港を出帆して鹿児島に上陸し、懐しの祖国の土を踏んで復員した。先に述べた姉妹聯隊であった歩兵第36聯隊は、昭和20年3月下旬、敵の海上機動艦隊が南大東島の近海を包囲し、空襲と艦砲射撃とを繰り返してきたため、わが軍は、敵の上陸を予期していたが、遂に沖縄本島のみで戦闘で終わった。

同聯隊は同年12月26日復員のため空母葛城に乗艦して30日宇品に上陸、原爆被災のなまなましい光景を見ながら、北陸に帰還した。

ここに師団創設以来47年、創設までの迂余曲折を通算すると実に72年、この間郷土の若き青年達の汗と血によって築き上げられた輝かしい伝統を有する第9師団は萬々の涙を飲んで解散した。